



きぼうの虹フォトコンテスト特選作品

「明日も散歩したい」
松岡 ほたか(学部生)

北大カーボンニュートラル 構成員1人当たりで必要となる コストの試算

北海道大学サステナビリティ推進機構
サステイナブルキャンパスマネジメント本部
特任助教

平 裕

Opinion!



2020年10月、政府は2050年までにカーボンニュートラルを目指すことを宣言した。しかしながら、現在の技術予測や社会条件においてその実現は相当の困難が予測されており、並大抵の努力では実現できない。そこで今回は、極めて大雑把な形にはなるが、北大のカーボンニュートラル実現に必要なコストについて、北大の構成員1人当りに換算した形で試算してみたい。

まず、北大の現状を簡単に整理する。北大の直近年度(2021年度)の年間の一次エネルギー消費総量は約117万GJ/年^{*1}(約325GWh/年)、年間の温室効果ガス排出総量は約85,000t-CO₂/

年^{*1}となっている。北大の構成員の総人数は約21,500人^{*1}なので、構成員1人当たりの年間の一次エネルギー消費量は約54GJ/人・年(約15MWh/人・年)、温室効果ガス排出量は約4t-CO₂/人・年と推計できる(なお、2020年度の北海道の世帯当たりの年間の一次エネルギー消費量は約53GJ/世帯・年となっている^{*2})。

この現状をベースとしながら、北大のカーボンニュートラル実現に必要な事業を検討する。今回は「ZEB(Net Zero Energy Building)」の考え方を参照し、一次エネルギー消費量の半分を省エネで減らし(50%省エネ)、もう半分を創エネでつくる(50%創エネ)事業を想定してみる。その他、森林吸収源対策や再エネ調達などの方策が考えられるが今回は扱わない事とする。

まず、50%省エネについて検討してみる。現状、北大では総延床面積で約90万m²^{*1}もの施設を保有しており、1人当たりでは約42m²/人のスペースを保有している。経済産業省の調査資料^{*3}を参照すると、既存施設を50%省エネとするための改修コストとして約10.6万円/m²という平米単価を推計できる。これに基づくと、北大の全ての施設を50%省エネとするためには約960億円、構成員1人分に換算すると約450万円/人の改修コストが必要と推計される。

次に、50%創エネについて太陽光発電を想定して検討してみる。一般的に、太陽光発電の発電容量1kW当たりの年間発電量は1000kWh/kWが目安と言われている。これに基づくと、北大の年間の一次エネルギー消費総量の50%をまかなうのに必要な太陽光発電の発電容量は約163MW、構成員1人分に換算すると約7.5kWと推計できる(本来は最大デマンド値から容量算定を図るべきであるが、現在の公表資料からは全てのエネルギー種別の最大デマンド値の算定が難しいため、年間の一次エネルギー消費量から推計している)。経済産業省の調達価格の資料^{*4}によると、2020年度の太陽光発電の設置費用は約25.3万円/kWとなっており、これに基づくと、太陽光発電による北大全体の50%総エネには約420億円、構成員1人分に換算すると約200万円/人の設置費用が必要と推計される(加えて、状況に応じて蓄電池や送電網など別途整備が必要となる)。なお、環境省の報告書^{*5}によると、太陽光発電の設置面積は約15m²/kWが必要とされており、これに基づくと、太陽光発電による北大全体の50%総エネには約240万m²の設置面積が必要となり、札幌キャンパス(約180万m²)よりも広い土地が必要と推計される。

以上、非常に大まかな机上の推計ではあるが、少しでも参考になれば幸いである。なお、今回の試算では、温室効果ガスについてはScope3排出量を含んでいない事、また、ランニングコストや耐用年数などを考慮したライフサイクルの観点での検討には及んでいない事を付記させて頂く。

(参照資料)

- ※1 北海道大学:北海道大学サステナビリティレポート2022, 2022年10月
- ※2 環境省:令和2年度 家庭部門のCO₂排出実態統計調査, 2022年3月
- ※3 経済産業省:既存建築物のZEB化推進に向けた調査, 2019年3月
- ※4 経済産業省:令和3年度以降の調達価格等に関する意見(案), 2021年1月
- ※5 環境省:平成22年度 再生可能エネルギー導入ポテンシャル調査報告書, 2011年4月



発行所
北海道大学生協同組合
札幌市北区北8条西7丁目
教職員委員会編集
電話 011-746-6218

主な記事紹介

二面 「全国教職員セミナーin横浜」に参加して
三面 Peace Now! Hiroshima 報告
四面 五面 北大生協きぼうの虹フォトコンテスト審査結果発表!!

保健職員委員会
科学研究員
院長 菅原 敏史
総合系 1年 加藤 湧

「全国教職員セミナー in 横浜」に参加して

教職員委員長 保健科学研究所 笠原 敏史

本来は2020年に行われる予定であった全国教職員セミナーが4年ぶりに9月2日より2日間にわたって横浜国立大学で開催されました。新型コロナウイルス感染症の流行によって何度となく延期を余儀なくされ、当初予定していたテーマから「コロナ禍を経験した大学と学生の今とこれから」に大きく変更されました。参加人数は約70名と例年に比べてやや少なかったですが、分科会での参加者の皆様はこれまでのコロナ禍での悩みやご苦労を話され、今後について積極的な意見交流を行っていました。

一日目に4つの講演と3つの特別報告があり、基調講演では大阪大学の村上正行先生より新型コロナウイルス感染症の流行下での全国で行ってきた大学の対応について、文部科学省の調査結果やご自身の大学での取り組みについてご報告されました。大学はコロナ禍での経験から学ぶことも多く、対面だけではなくオンライン授業やオフライン授業という新たな授業形式はニューノーマル時代における新たな大学教育を考える良いきっかけになったのではないかと話されていました。一方で、大学での勉学や研究以外の付加価値、たとえば、友人との交流などの人間関係の構築は不十分であると思われる、今後の社会にどのような影響を与えるか見守らなければならないと話されていました。

その他の講演では、三重大学の朴恵淑先生より三重大学の環境・SDGsの取り組みについて紹介されました。三重大学は、三重県が創設した「三重県SDGs推進パートナー登録制度」に高等教育機関として唯一登録され、さらに、大学生協と協働事業として早い時期から生協でのレジ袋有料化によるレジ袋ゼロ運動を展開し、その効果について報告されました。朴先生は、2021年の国連機構変動枠組条約第26回締約国会議(COP26)に参加され、オバマ元大統領の演説を聴講し、「全世界が一丸となって気候変動(危機)へ積極的な対応を講じる必要性と、環境と経済の調和の取れた世界が実現できる」と力強いメッセージを受けたと話されていました。一人一人の行動は小さいかもしれないが、

続けることが大事と強調されていました。

二日目は4つの分科会があり、「コロナ禍の経験を踏まえた学生の学びと成長を考える」、「新型コロナウイルス禍を経て考える、大学と学生の『食と安全』」、「民主主義と協同を紡ぐ」、「『環境人材』を育てる〜持続可能な社会の構築をめざして」というテーマで行われました。私は「コロナ禍の経験を踏まえた学生の学びと成長を考える」に参加しました。この分科会での北海学園大学の中國桐代先生の講演は興味深く、コロナ禍の2年間の北海学園大学での休学率と退学率、そして、就職率はコロナ禍前とほとんど変わらず、逆に、休学率は減少し、単位取得率は増加していたと報告されました。一つの要因に絞り込むことは難しいとしたりうえで、マスコミなどで報道されている学生の心理状況が必ずしもマイナス作用ではなく、授業形態がオンラインやオンデマンドになったことで受講しやすくなったことでプラスに作用した可能性もあると述べられていました。分科会では、他の大学の方々とも意見交換をする機会があり、情報を共有することが出来ました。次回の全国教職員セミナーは2年後を予定しています。



分科会の様子



講演の様子



受付の様子

いじわるじいさん

昨年、知人から毎年届く信州の林檎が来なかった。(3月が温かく4月に気温が零下の日もあった。この異常気象で収穫量が激減)、と生産者便りに書かれていた。北海道は昨夏、干ばつで薯と玉葱が不作だった。それぞれ、驚きの高値になったことも忘れられない。昨年水不足に苦しんだ農家の従妹が、今年8月には洪水に遭遇。濁流の動画が届いた。大きな川のように黄土色の水が流れている。下は玉葱と南瓜の畑。茂った葉が高く並んでいる豆は、下3分の1が泥水の中だった。▼水が引いた後は流れ着いたゴミを片付け、貼りついた泥を落とし、土寄せの作業に追われた。それから40日。玉葱、南瓜も、豆も生きていた！従妹はその逞しさに驚きながら、低地にある仲間の畑の心配をする。▼ここ数年の気象の異常ぶりはどうだろう。テレビから警戒警報が頻繁に流れ、河川氾濫の映像が出る。気温、雨量が観測史上最大、と気象庁から発せられる。知人や従姉の苦境を知っては、これらの一つ一つが身に迫って感じられ、気象情報から目が離せなくなつた。▼台風がまた発生した。北海道に上陸した台風の風音が、被災者の悲鳴のように聞こえる。いや、傷ついた地球が助けを求める悲鳴なのかもしれないとも思う。

(今日子)

Peace Now! Hiroshima 報告

総合系1年 加藤 湧 (学生委員会)



私は広島、長崎、沖縄の3地域で行われたPeace Now!2022のうち、9月1日～2日にかけて開催されたPeace Now! Hiroshima (以下PNIH)に参加してきました。私はPNIHに参加するまで、戦争や原爆について学ばなくてはいけないと思いつつも、たまにテレビで放送されている特番を見たり、本を読んだりする程度のことしかできておらず、広島を訪れたこともありませんでした。そんな私にとってPNIHはとても魅力的で、この機会に広島で戦争や原爆について深く学び、平和について考えようと思い、参加を決断しました。

1日目の平和資料館見学とフィールドワークでは、初めて訪れる広島の土地で、戦争の記録や爪痕、人々の平和への願いに触れました。平和記念資料館では思わず目をそむけたくくなるような写真や絵に加えて、人々の壮絶な体験の記録を目の当たりにして衝撃を受けた一方、戦争を経験していない私たちが戦争について学ぶことの難しさも感じました。資料館の展示では、被爆者の方々が見た色付きの光景や嗅いだにおい、聞いた音などはわかりません。展示だけでもかなりショッキングでしたが、実際の状態は展示の何倍も悲惨で残酷なものだったのだらうと思います。戦争を経験していない私たちが得られる情報には限界があることを実感したので、私たちは今得られる情報をできるだけ多く集め、戦争経験者が見てきた世界を知ろうとする努力を続ける必要があると強く感じました。

フィールドワークでは、平和記念公園周辺の遺構などを見てまわりました。フィールドワークで最も心に残っているのが、爆心地を示す石碑です。この石碑は病院のすぐ横の、意識していないと素通りしてしまうような場所にあります。私はこの石碑を見たとき、こんな土地裏にいきなり原爆の遺構が現れることに驚き、普通の町の一角にそんな歴史があることに衝撃を受けました。私たちが何気なく生活している町の中にも戦争遺構が存在しているということを実感し、自分の地元や今住んでいる札幌市の戦争遺構についてももっと調べてみようと思いました。

2日目には、被爆者である田中さんと、ピースボランティアや被爆体験伝承者として活動されている榎原さんのお話を伺いました。田中さんの講和では、初めて対面で被爆された方のお話を伺うことができました。被爆者を含む戦争経験者の高齢化が進むなか、私たちは実際にそういった方々のお話を伺うことのできる最後の世代であり、貴重なお話を伺うことができるととてもありがたく思いました。今回お話をしてくださった田中さんの講話の中で最も印象に残っているのが、質疑応答の時間に挙がった「今までで一番つらかったことは何か」という質問に対する答えが、「今が一番つらい」だったことです。戦争中や戦後間もない時期などにたくさんつらい経験をされてきたにもかかわらず、そのような答えが出てくるということは、核や戦争をめぐる現在の状況がかなり深刻なものなのだと思います。私は正直核の現状についてあまり知識がなく、危機感も薄かったのですが、この機会にきちんと現状についても学ばなくてはいけないと思いました。

榎原さんは、戦争を経験していない世代であり、広島在住でもありませんが、そんな状況の中で自身にできることを模索し、平和活動や戦争の記憶を伝える活動に取り組まれています。平和活動や伝承活動は広島や長崎など現地にゆかりのある人がするイメージが強かったのですが、榎原さんは私に、被爆地にゆかりの無い人にもできる活動があるのだと教えてくれました。

PNIHでは、グループワークを通して平和について考え、意見を交流する機会もありました。同年代で、日本各地から集まった人たちとのグループワークはとても充実していて、新しい知識を得たり、今までの自分にはなかった考えに触れたりすることができました。広島出身で幼いころから平和学習を受けてきた人や、平和のための署名活動をしたことがある人、自大学の学生委員会で平和活動を行っている人など、平和の実現のために行動を起こしている人の存在を知り、自分も何かしなくてはと奮い立たされました。

今回のPNIHを通して、私は戦争の歴史を学び、平和について考え、平和への思いをより強いものにしました。今回学んだこと、考えたことを身の回りの人に伝えていき、平和への思いを広げていくことが、

これからの私の使命です。今回のPeace Now!の全体テーマである「つなぎ、ひろげる未来へのバトン～私からあなたへ、あなたから世界へ～」を実現すべく、まずは「私」から私の周りにいる「あなた」へと、バトンをつないでいこうと思います。また、今後も継続して戦争や平和について学び、1945年8月6日に起こった悲劇をもう2度と繰り返さないために自分には何ができるのか考え続け、自分にできる行動を起こしていきたいです。



「Tomorrow will be better!」 審査結果発表!!

「きぼうの虹」フォトコンテストも今年で9回目となりました。テーマは「北大百景2022 ～ Tomorrow will be better! ～」。7月1日から8月27日までの約2か月の長期の応募期間で開催いたしました。今年は少しずつ大学に来る機会が増え、北大の美しい風景を楽しむ様子が感じられる作品が多く寄せられました。全66点の素晴らしい作品の中から各審査員それぞれの感性に響いた作品として、特選1点、各委員会賞4点と特別賞1点を選出いたしました。ほかにも素晴らしい作品が多く、今回全てをご紹介できないのが本当に残念です。応募していただいた皆様、本当にありがとうございました。

特選

明日も散歩したい

松岡 ほたか (学部生)

少しでも時間があれば歩きたいところがたくさんあって、最高です。

●審査員コメント

ここ数年のコロナ禍での大学生活が伝わる素晴らしい作品です。久しぶりに行われた対面授業の後でしょうか、もう少し外の空気を吸っていたいという気持ちが題名からも伝わります。閑散とした大学構内はコロナ前とそれほど変わりません。しかし、マスクをした学生と撮影日からコロナ禍での大学生活であったことを後に思い出させてくれる気がします。

今年のフォトコンテストの特選にふさわしい作品です。



学生委員会賞

Decorated object

Yoshida Itsuki (学部生)

気に入ってます。

●審査員コメント

木の枝の隙間から光が差し込んで、その影が濃く雪に写し出されている光景がとても幻想的だと思いました。

院生委員会賞

遠い約束

山本 奈央 (大学院生)

北大の素晴らしい紅葉と建物を背景に雨や黄色に染まった葉が少し寂しさを感じて。

●審査員コメント

落葉していく紅葉の儚さと、その中でも前を向く強い意志を感じさせる被写体の表情がマッチしていますね。



第9回 フォトコンテスト 「北大百景2022」

審査員：生協学生委員会、生協院生委員会、留学生委員会、生協教職員委員会、生協理事会室

特選および各賞入賞者の皆さんには、生協電子マネーを贈呈いたします。



教職員委員会賞

鏡の国から見にきました 森 啓 (大学院生)

普段は鏡の国の中から北大を見ている小人たちは、秋になるとこちらの世界に来て直接銀杏並木を見物します。

●審査員コメント

もっと黄葉が進んだときだと良かったのですが、ローアングルで鏡面状の水たまりの逆サイチョウもよく撮れているかなと。

理事会室賞

桜と雪と 春山 博昭(学部生)

中央ローンにて暖かさを感じる。

●審査員コメント

久しぶりに学生で賑わう中央ローンの様子がとても楽しいので嬉しくなります。桜と雪と一緒に見ることができるのも北大ならではの光景ですね。



きぼうの虹特別賞

都ぞ弥牛 樫山 淳(学部生)

北大農場の牛と手稲山に沈む夕日、そしてポプラ並木。その様子を北大の寮歌である都ぞ弥生にかけて「都ぞ弥牛」と名付けました。

●審査員コメント

自然溢れる北大と、それを囲むように建つビルや住宅街との対比が良く、正に北大でしか見ることのできない光景だと感心しました。構図も素晴らしいです。



心とからだ健康を考える

大学院教育学研究院 准教授

渡邊 誠



下に兄弟姉妹が生まれる、上級生になる、先輩になる、上司になる、親になる…そんな風にして、人は好むと好まざるとにかかわらず、上の立場になり、力、もつと言うと権力(英語で、power)を持つようになります。そして、立場が下の人間は、上の人間に、時に立ち向かい、批判をします。米国の精神科医サリヴァンは、若者は本物の権威には反抗しない、反抗するのは「くだらない権威 silly authority」に対してだけだ、と言ったといいますが、どうなのでしょうか。

大学教員である私も、学生から批判を受けることが、もちろんあります。今のようになると、自分の授業評価が当たり前になるもつと前の頃、自分の授業について学生に授業評価を求めながらあれこれ改善しようとしていて思ったのですが、どうも肯定的評価は八割くらいが限界で、頑張ってもそれ以上にはなかなかない。もしかすると、みんながみんな良いと言う授業は、洗脳かなんぞいともかくかえってなんかもマズイのではないかと。つまり、授業についての批判的意見は、避けられないのではないかと。

もし立場が下の人間に対して、批判を許さない、という態度を取れば、相手は表面的な「よい子」になるか、あるいは全面的に決裂か、なるように思います。これは、どちらにとつても失うものが多いのではないのでしょうか。そもそも、批判する者とされる者の関係には、相補い合うという面があるように思います。そういう関係は密度が濃いので、いつしかお互いに似てきがちです。

じゃあ、批判してくる人間に対してどうするか。学術研究にかかわる場にいる者としては、そういう相手は論敵みたいなものか、と思ったりします。まあ、敬意を払う、ということでしょうか。そもそも、授業に関して言えば、批判的な意見を向けてくる学生は、優秀です。私には例外がほとんど思い浮かびま

こころの健康を考える ⑦

立場が下の人から批判されるって、ありますよね

せん。次の時代を担うのは、こういう人たちではないかと思えます。まあ、ちよつと気掛かりなところをあげると、そういう人たちは少し不安定な傾向がある場合が多い気がします。これは私の専攻が臨床心理学であることと関係があるかもしれませんが、違ふ分野では当てはまらないかもしれません。

結局突き詰めて考えてゆくと、批判を向けてくる、立場が下の相手と信頼関係がつかれるかどうかというところに、行き着くような気がしています。そう言えば、もつと自分が若くて元気だったころ、教師というのは、「このオッサンの言ってることはホンマか」と疑わしげな目でこちらを見ている学生から信頼されてなんぼのものや！と威勢よく考えていたことを、久しぶりに思い出しました。

ところで、立場が上の人間がこういう態度を取ろうとすること、本人のこのころの健康にいいんでしょうか？いやいや、そりゃ悪いですよ！私のさる優秀な友人は、職場で上には文句を言う、下には言わないという主義を持っていて、友人の同僚と思しき人たちが、露宴に出た時、友人の同僚と思しき人たちが、あいつの上司は地獄だつて、と話しているのが聞こえてきました(ちなみに友人は、いい奴ですよ)。こころの健康を考えると、このようにけしからん！と思われるかわりません。でも、健康がすべてに優先するわけではないでしょう。これは、私が北大保健管理センターに勤めていたころ、当時のセンター長であった内科医の武蔵学先生から教えていたこと、今も時折思い返していることです。こころの健康が例外であるとは思えません。ま、つらいところではありますけれど、それへの対処は別途考えるところで…

ほけんのお話

多くの方が自家用車を持っていることの便利さを実感していると思います。北海道は特に公共交通機関が充実していないので、生活において自家用車が欠かせない場面も多いのではないのでしょうか。一方で、自家用車購入などの初期費用、燃料代、駐車場代、車検代、自賠責保険、任意の自動車保険などの維持費も結構な金額になります。自家用車を持たず、タクシーやレンタカーを使つたほうが費用がかからないとわかっていても、自家用車を持つほうが便利で楽しい。

また、自家用車を運転するリスクがあることもみなさん承知しています。十分注意して安全運転していても、ちょっとした事故もあるので事故に遭わないとは言いきれません。相手のいる事故に遭えば、賠償やケガに対処するため時間と労力を割くこととなります。自分が悪くないと思つても心が折れることもあります。ちよつとしたミスで大きな事故になることもあります。もしものことを想定して、費用が掛かっても自動車保険に加入し、事故に遭遇したら保険会社に任せると決めることが安心につながります。

自家用車のある生活を続け、リスクを低減するためには、日頃の自覚や注意が必要です。

そんなことを考えるヒントに、日本自動車工業会のHPに『安全すてきなカーライフPASSPORT』というコーナーがあるので紹介します。「過信は禁物！クルマの安全装備」「うっかり事故は、こう防ぐ」「どうする!?こんなとき」の3つに分けてカーライフのいろんな場面を想定して書かれています。今更のようなくとも書いてありますが、整理されていて、すごく参考になるはずです。

必要な手立てをして、自家用車のある生活が安全で快適なものになればと思います。



クラーク書籍便り
Vol.11

久々に行動制限のない夏休みだったこともあり、観光客らしき方のご来店が多い8～9月でした。その影響もあり「北大」「北海道」関連のタイトルがランキング上位を占めました。「北海道大学ピースガイド」「北大キャンパスガイド」「北海道大学もうひとつのキャンパスマップ」はランキング常連ですが、第7位の「北海道建築さんぽ」もオススメです。北大の建物も多数紹介されていますし、歴史と温かみが伝わってくる画に癒されます♪

クラーク9月一般書ランキング

	書名	著者名	出版社		書名	著者名	出版社
1	北海道大学 ピースガイド	ピー・アンビヤス 9条の会・北海道	ピー・アンビヤス 9条の会・北海道	6	英語教育論争史 講談社選書メチエ	江利川春雄	講談社
2	北大キャンパスガイド	北海道大学 COSTEP	北海道大学 出版会	7	北海道建築さんぽ	佑季	エクスタレック
3	札幌むかし写真帖	北海道新聞社	北海道新聞社	8	フランソワーズ・ パストル	桑原真夫	論創社
4	ブルーカーボンとは何か 岩波ブックレット	枝廣淳子	岩波書店	9	北海道大学もうひとつ のキャンパスマップ	北大ACM プロジェクト	寿郎社
5	危機の中の学問の自由 岩波ブックレット	羽田貴史	岩波書店	10	北海道 2023～2024 地球の歩き方	地球の歩き方 編集室	地球の歩き方

北大生協には「学生・院生・留学生・教職員」の4つの組織委員会があります。

北大生協組織委員会報告

学生委員会

■「オープンキャンパス活動」を実施しました！

8月7日(日)、8月8日(月)2日間で開催されたオープンキャンパスに合わせて、学生委員会でも「北大生と話をしよう」「キャンパスツアー」「YouTube動画投稿」「受験生応援冊子NITOVEの作成」の4つの企画を行いました。雨に降られてしまう場面もありましたが、多くの受験生・保護者にご参加いただきました。

■「夏店舗活動」を実施しました！

7月下旬から8月上旬にかけて、食堂店舗と購買店舗でそれぞれ企画を行いました。具体的には、食堂ではメニューの組み合わせ提案企画を、購買ではアイスの人気投票企画を行いました。

■七夕企画を実施しました！

8月上旬に、北部購買で短冊に「ねがいごと」と「生協への要望」を書いてもらうという企画を行いました。テスト期間やOCと被っていたこともあり、「願い事」の割合が高く、全体では36名の参加がありました。



院生委員会

■第2回院生フェスタ開催します！

7月に開催して好評を博した院生フェスタの第2回目を11月11日に開催します！

研究室外の人と交流したい、研究・就活について相談できる友人が欲しい、そのような皆さんを大歓迎！

今回は飛び入り参加もOK！事前登録をしてくださった方には小さなプレゼントも。
詳しい情報は同封のチラシからご覧ください。

■書評誌「ほんでないかい」執筆作業中！

今年も12月頭を目途に書評誌を刊行します！今年の特集記事では北大生協とあるお方にインタビューさせていただく予定です。乞うご期待！

■院生委員会公式Twitter

@Hokudainsei_coo

院生生活や生協にまつわる情報を毎週4回ほど定期的に発信しています！是非フォローをお願いします！

■院生委員会連絡先

hokudai_insei@coop.hokudai.ac.jp

院生生活で困っていることやご要望があればぜひご連絡ください。

教職員委員会

■教職員総代会議・・・9月と10月に開催した総代会議では営業報告の他、組合員の声の取組や新入生推奨PCについて意見交流しました。また食堂や購買の食品品揃えなどについても意見が出されました。

■教職員委員会・・・9月16日と10月13日に定例会議を開催しました。さぼうの虹の編集や、総代会議での意見について、またフォトコンテスト入賞作品の選考などを話し合いました。教職員向けの加入案内についても議論しています。

教職員委員会では組織委員を募集しています。教職員総代と理事会をつなぐ役割を担い、月一回の定例会議を中心に活動しています。興味のある方は、理事室までメールでお問合せください。

■「さぼうの虹」・・・「さぼうの虹」この冊子です。教職員委員会が編集し、隔月を基本に発行しています。

【編集後記】

後期が始まって1か月が経ち、またキャンパスにぎわいが戻ってきました。これから研究も本格化する時期ですね。生協も後期から、工学部食堂の夜営業、中央食堂の20時までの延長営業などを行って、応援していきます。また学生委員会や院生委員会も、様々な企画を行っていきます。寒い季節になってきますが、みなさまも健康にお過ごしください。

大学文書館へ 行こう

第12回 「ブルックス記念碑」

北海道大学大学文書館 井上 高聡



札幌村郷土記念館の「W.P.ブルックス顕彰碑」
(2022年10月4日撮影)

ブルックス記念碑の除幕

去る十月四日、東区北十三条西十六丁目にある札幌村郷土記念館で、ウィリアム・ペン・ブルックス(一八五一〜一九三八年)を記念する碑の除幕式がありました。地域の方々が列席されたほかに、札幌市や商工会議所、在札幌米国領事館からの来賓を迎え、さらにブルックスのご子孫もアメリカからWEB参加をされてメッセージを届けられました。

「札幌村」は、札幌周辺のうち近代に最も早く和人が入植した地域です。幕末の一八六六年、幕府の蝦夷地統治機関であった箱館奉行が、配下の大友亀太郎に差配を命じた開墾地「御手作

場」を起源とし、維新政府が開拓使を設置した後、札幌本府の建設と並行して札幌村への入植が拡大していきます。近代的な都市としての札幌は、開拓使が行政都市として建設した中心市街部に始まりますが、「市街」に對する「郊外」の成り立ちとして、札幌村の地域形成も歴史の重要な要素です。

札幌村のタマネギ生産

札幌村では、一八八〇年ころからタマネギの栽培を始めました。当時、札幌農学校教授であったブルックスが直接、その栽培法を指導しています。札幌村



ブルックス肖像写真
(1879年、大学文書館蔵)

が栽培に力を入れたのは、ブルックスがアメリカから移入した「イエロー・グローブ・ダンヴァース」という品種です。ブルックスは、札幌農学校の「農学」の講義で、ダンヴァース・オニオンについて、「マサチューセッツ州の同名の町が原産地で、大粒で厚みがあり、黄色で風味がよく、生産性が高い。早熟で、日持ちがよく、園芸栽培に適している」と説明し、北海道の地味に適合すると評価しています。札幌村は、イエロー・グローブ・ダンヴァースの栽培方法に工夫と改良を重ね、「札幌黄」という銘品に育て上げます。一時、札幌黄は他の品種に押されてあまり目にしなくなりましたが、近年、再び脚光を浴び、現在は札幌伝統野菜として道外にも知られるようになっていきます。地域産業の興隆の歴史の出発点にブルックスが一枚噛んでいたわけです。

ブルックスが担ったこと

ブルックスは、札幌農学校開校から五ヶ月後の一八七七年二月に札幌農学校教授に着任し、同年四月に離任した教頭W・S・クラークの仕事の多くを引き継ぎました。ブルックスの仕事で最も重要なのは、札幌農学校の附属農場である農校園の管理責任者として経営に当たったことです。クラークは、学生が農業を実地に学ぶことの重要性を強調し、学校附属の農場が不可欠であると主張しました。設置した農校園の責任者には、マサチューセッツ農科大学時代の教え子であるブルックスに白羽の矢を立て、経営を託しました。ブルックスは海外から様々な農産物の多様な品種を移入し、農校園で試作し、その試作には農学校生を参加させて実地に農業技術を学ばせました。栽培成績の良い農産物を農業関係者に広く紹介し、さらに農産物の流通・販路の形成も提言しています。

札幌農学校第二期生の新渡戸稲造は、恩師ブルックスについて、学理に深く通じているわけではなく、弁舌も下手な方で、文才にも乏しかったとユーモアを交えて回想しています。しか



新渡戸稲造が記録したブルックス「農学」講義の
受講ノート (1880年、大学文書館蔵)

し、批評すべきはそこではないと強調します。試験問題で果樹運搬に用いる縄の直径を問い、講義では農具を使用するときの指の捻り方や節の曲げ方まで説明して、「百姓になるには、かくばかり困難に及ぶものか」と学生たちを悩ませつつ、農業に従事する卒業生には「ブル」先生の講義は、まことに有益と言わしめる、そうした「実業に方(あたり)たる事蹟」こそ評価すべきだと、新渡戸は述べています。

札幌村郷土記念館は、ブルックスも関わったタマネギ生産に関する資料を展示しています。新たなモニメントの建立を機に、ブルックスの事蹟を改めて見直したいと思います。